
スネイク・セクス

虹原大好

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スネイク・セクス

【Nコード】

N1179L

【作者名】

虹原大好

【あらすじ】

某所で見たフェンシング＋スカイ・クロラに触発されて書いてみました。西洋剣術＋スカイ・クロラものです。

文体模写とか初めてやったので至らぬところがあるかもしれませんがよろしくお願いします。

ちなみに用語解説は今のところやる予定ありません。

Wikiだの何だのから拝借しまくったおかげでドイツ語と英語入り交じってますし「なんか凄いことをすごいスピードでやってるーっ！！？」感が出てればそれでOKなのです。

そして要望があれば動作説明書いたり、続きが思い浮かべば続き書くかもしれないので連載小説にさせて下さい。

ちなみに今のところ続き書く予定はありません

5／9

用語解説及び red wingを改訂、 red wing改定前の文章も残してありますので改訂前後を見比べての評価を希望します。

red wing再改訂

あたしをイカそうとして、油断したのだ

そういうのを早漏っていうんだよね

怒りと苦痛に満ちた、あいつの絶叫が聞こえる

ダメだよ

まだ終わってない

あたしたちはまだどっちもイツてない

そこには夢などなく

怯えもない

ただただ純粋な命の交わりがあつて

その二つの命が、死という細い境界線の上でダンスする

最高のセックス

詠み人知らず、そして偉大なる師匠

なぜ山を登るのか？　そこに山があるからだ。どこかで聞いたことがある、そんなやりとり。そうだ、何かをするのに理由なんて必要はない。

人間は、僕はいつも一つのことだけをする。それはできることだけ。出来ること以上のことをする気はないし、そんなことする必要はある時は。自分でやるには怖くてできないこと、死ぬときだけ。

僕は臆病なんだ。それも母親や、婆ちゃんが強姦されていようと、幼馴染が競りにかけられていようと、一緒に遺跡やら街やらを荒らしてバカ騒ぎしてきた仲間が目の前の青入道にぶっ飛ばされていようと。たった一つのことしかできない。できない以上、何かしらの工夫をしなくちゃ、殺しなんて出来ない。

あたりを見回す。

少なくともあの、子供にしか股間が反応しないモグリの医者はこの部屋のどこかで熟睡してるだろう。あいつは確か女の股から出るアレ以外の血を見るとデカイ杖持てすっとなんでいく奴だ。じゃなきゃあっちでせわしなく”まほう”とかいうのを編んでたあいつは挽肉になっていない。どっかの王国で騎士やってたらしい、やたらと身だしなみを気にするあいつも、そこの化物よりも不気味な格好で天井に引っかかっていたりなんかしない。

こんなスプラッタ劇場を引き起こしたであろうそいつは僕より頭2つ分くらい大きく、何に使うのか分からないコウモリのような翼と青い肌と、細く筋肉質なシルエットが印象的だ。

そんなやつが、にやにやしながらこちらに歩み寄ってくる。

そういえば、いきつけの酒場のオヤジが言ってた。オマエは騙されやすいんだから、やたら慣れ慣れしいヤツには注意しろって。僕にはあんな肌の青い友人なんかいない、記憶力に自信がなくてもわかる、完全に初対面だ。

にやにやしながら、血まみれのツーハンドソードを持ちながら、歩み寄ってくる。

じゃあ、敵だ

怖い。自然に、口の端が釣り上がる

心臓が、何時もより速い。速く、強い

自分の右腕の延長線上にあるブロードソードを、握り直す

親指と人差し指をリカッソにかけ、握り潰すように、強く、強く背筋がゾクゾクする。これが、悪寒というやつだろうか？

バックラを前に突き出す

バックラの中心線は正中線と直角、それでいて、腕が千切れそうなほど前へ、前へ

脇を締めて、右腕と、その付属品を全てをバックラで隠す
フラウエン・ハット

『臆病な女の構え』

僕らしい、怖がりの構え

青入道はいつの間にかにやにや笑いをやめてセンターガードに構え、いやアレはソードが正中線の左にズレているからプルークか？
正直、どっちでもいい

青入道のヤツはおそらくこちらを舐めきっている
だってほら、重心の移動が遅い
だから、やることはひとつ

構えを解かずに飛びかかる
ヤツの切っ先をくぐり抜け
牽制替わりのハウ

案の定、ソード同士がぶつかり合う
そのまま鏢で下に押し込む
ソードを固定して、まずは腹に一発
弾かれる

下からアッパー気味に柄頭が打ち出される

こいつは本命じゃない

僕は顔で柄頭を受け止め
間髪入れずに飛んできたシュナイデンを受け止め
そのまま、ヤツの顔に唾を吐く

たたらを踏んで後ずさるヤツの顔は目が点になったりこっちを二度見してみたりと中々愉快に変化する。

コウモリを連想させる翼が生えていたり、肌が青かったり（殴った感じではペイントの線も薄そうだ）でなんとなく気がついてはいたけど、どうやら青入道のヤツは人間ではないらしい。

だってほら、相手の顔に唾を吐くって結構メジャーな、親愛の挨拶らしいじゃないか。そう酒場のオヤジも言っていた。だから間違いない。

それを受けて、眉間にシワを寄せて怒り狂うなんておかしいじゃないか。みんなもそう思うだろう？

だから、こいつは人間じゃない。

人間じゃないなら、罪悪感なんて、湧かない。

今、ヤツの目が据わった

ヤツから飛びかかる

オルクスからの突き

バックラで弾く

更に飛びかかる

アッパー気味に柄頭が打ち出される

よけられない、スピードが違う

顎を打ち抜かれる

気合でカバー

更に上からのハウ

無理やりソードで受け止める

今度はこっちが下

まづい

相手のリール

ソードが巻き込まれ、体の外に出る

ソードが弾かれる

スラスト

下半身は崩されている

ソードもバックラも弾かれています
まずい
避けられない

ぼきり

青入道のソードが左腕に突き刺さる
そのまま貫通して首筋を掠める
首から血の吹き出す、ぬるりという感触

助かった

そして、チャンス

僕の左腕ごとリール

ヤツのソードを脇の下に挟み込む
ぶらり

バックラが垂れ下がる

顎へと、切っ先を打ち込む

青入道は悔しそうで、恨みがましい、この世の全てを呪い殺すよ
うな顔をしていた。

もっと、楽しみたかったね

ぼきり

ヤツの失敗した、首へのスラスト

血が吹き出す

ぴーって、笛みたいな音がする

まだ、死んでいない

首からソードを引き抜き、今度は胸へ

ぼきり ぷちゅう

心臓を潰した

まだ、死んでいない
横薙ぎにハウ
そして、股間へ蹴り
ぽきり ぶち

青入道は全身をびくり、と大きく震わせた後、ゆっくりと地面へ倒れて行く。

殺した

青入道を、殺した

あたりを見回す

僕の足に、白い粘液がついている。

ああ、なるほど

こいつも、興奮していたんだ。

r e d w i n g 改訂前1（前書き）

r e d w i n g 最新話の改訂前の文章です。

red wing 改訂前1

あたしをイカそうとして、油断したのだ

そういうのを早漏っていうんだよね

怒りと苦痛に満ちた、あいつの絶叫が聞こえる

ダメだよ

まだ終わってない

あたしたちはまだどっちもイツてない

そこには夢などなく

怯えもない

ただただ純粹な命の交わりがあつて

その二つの命が、死という細い境界線の上でダンスする

最高のセックス

詠み人知らず、そして偉大なる師匠

なぜ山を登るのか？ そこに山があるからだ。どこかで聞いたことがある、そんなやりとり。そうだ、何かをするのに理由なんて必要はない。

人間は、僕はいつも一つのことだけをする。それはできることだけ。出来ること以上のことをする気はないし、そんなことする必要はある時は。自分でやるには怖くてできないこと、死ぬときだけ。

僕は臆病なんだ。それも母親や、婆ちゃんが強姦されていようと、幼馴染が競りにかけられていようと、一緒に遺跡やら街やらを荒らしてバカ騒ぎしてきた仲間が目の前の、妙ちくりんな翼の生えた、2m前後の青入道にぶっ飛ばされていようと。たった一つのことしかできない。できない以上、何かしらの工夫をしなくちゃ、殺しなんて出来ない

あたりを見回す。

少なくともあの、子供にしか股間が反応しないモグリの医者はこの部屋のどこかで熟睡してるだろう。あいつは確か女の股から出るアレ以外の血を見るとデカイ杖持ってすっとんでいく奴だ。じゃなきゃあっちでせわしなく”まほう”とかいうのを編んでたあいつは挽肉になっていない。どっかの王国で騎士やってたらしい、やたらと身だしなみを気にするあいつも、そこらの化物よりも不気味な格好で天井に引っかかっていたりなんかしない。

青入道はほぼ、どこでつけたのかわからない円形状の古傷とかを除けば擦り傷ひとつ負ってなくて、にやにやしながらこちらに歩み寄ってくる。

そういえば、いきつけの酒場のオヤジが言ってた。オマエは騙されやすいんだから、やたら慣れ慣れしいヤツには注意しろって。僕にはあんな肌の青い友人なんかいない、記憶力に自信がなくてもわかる、完全に初対面だ。

にやにやしながら、血まみれのツーハンドソードを持ちながら、歩み寄ってくる。

じゃあ、敵だ。

どうしよう、怖い。自然に、口の端が釣り上がる。

心臓が、何時もより速い。

自分の右腕の延長線上にあるブロードソードを、握り直す。

親指と人差し指をリカッソにかけ、握り潰すように、強く、強くバックラを前に突き出す

バックラの中心線は正中線と直角、それでいて、腕が千切れそうなほど前へ、前へ

脇を締めて、切っ先まで全てをバックラで隠す

フラウエン・ハット
僕らしい、怖がりの構え

青入道はいつの間にかにやにや笑いをやめてセンターガードに構え、いやアレはソードが正中線の左にズレているからブルークか？
正直、どっちでもいい

青入道のヤツはおそらくこちらを舐めきっている
だってほら、重心の移動が遅い
だから、やることはひとつだ

構えを解かずに飛びかかる
ヤツの切っ先をくぐり抜け
牽制替わりのハウ

案の定、ソード同士がぶつかり合う
そのまま鏢で下に押し込む
固定して、まずは腹に一発
ソードが弾かれる
下からアッパー気味に柄頭が打ち出される

こいつは本命じゃない

僕は顔で柄頭を受け止め
間髪入れずに飛んできたシュナイデンを受け止め
そのまま、ヤツの顔に唾を吐く

たたらを踏んで後ずさるヤツの顔は目が点になったりこっちを二度見してみたりと中々愉快に変化する。

コウモリを連想させる翼が生えていたり、肌が青かったり（殴った感じではペイントの線も薄そうだ）ソード使ってる癖に筋肉のつ

き方が拳闘やってるやつみたいに絞まっていたりでなんとなく気がついてはいたけど、どうやら青入道のヤツは人間ではないらしい。だってほら、相手の顔に唾を吐くって結構メジャーな、親愛の挨拶らしいじゃないか。そう酒場のオヤジも言っていた。だから間違いない。

それを受けて、眉間にシワを寄せて怒り狂うなんておかしいじゃないか。みんなもそう思うだろう。

だから、こいつは人間じゃない。

人間じゃないなら、罪悪感なんて、湧かない。
今、ヤツの目が据わった

今度はヤツから飛びかかる

オルクスからの突き

バックラで弾く

更に飛びかかる

アップパー気味に柄頭が打ち出される

よけられない

顎を打ち抜かれる

気合でカバー

更に上からのハウ

無理やりソードで受け止める

重なりあう、ソード

まずい

相手のリール

ソードが巻き込まれ、体の外に出る

ソードが弾かれる

スラスト

下半身は崩されている

ソードもバックラも弾かれている

まずい

避けられない

まずい

まずい

まずい

ぼきり

青入道のソードが左腕に突き刺さる

そのまま貫通して首筋を掠める

首から血の吹き出す、ぬるりという感触

助かった

そして、チャンス

僕の左腕ごとリール

脇の下に挟み込む

ぶらり

バックラが垂れ下がる

顎へと、切っ先を打ち込む

青入道は悔しそうで、恨みがましい、この世の全てを呪い殺すよ
うな顔をしていた。

もっと、楽しみたかったね

ぼきり

ヤツの失敗した、首へのスラスト

血が吹き出す

ぴーって、笛みたいな音

まだ、死んでいない

首からソードを引き抜き、今度は胸へ

ばきり　ぷちゅう

心臓を潰した

まだ、死んでいない

横薙ぎにハウ

そして、股間へ蹴り

ばきり　ぶち

青入道は全身をびくり、と大きく震わせた後、ゆっくりと地面へ倒れて行く。

殺した

青入道を、殺した

あたりを見回す

僕の足に、白い粘液がついている。

ああ、なるほど

こいつも、興奮していたんだ。

red wing用語解説（前書き）

これはあくまでred wingに使われている西洋剣術独特の言い回し、用語をまとめたものです。

こいつとred wingを両方ブラウザに出して読むのはやめて下さい。読んでいる時の疾走感が著しく失われます。

あくまでred wingを読んだ後、わからなかった用語を確認する程度にとどめておいて下さい。

red wing用語解説

・リカッソ……剣身の根元にある刃をわざと付けない部分。無理やり日本語に訳すなら刃根元。

・センターガード……所謂日本剣道で言う中段の構え。運用も形も日本剣道の使い方と同じ。

・ブルーク……センターガードから剣を右にズラした構え。日本剣道での八相と中段の中間辺りのような格好になる。

・ハウ……所謂「斬り」西洋剣術では剣を打合わせるための牽制に使われることが多い。ゲームでは何故か下記のシュナイデンと区別のついてないゲームが非常に多い。というかデモンズソウル以外殆ど区別がついてない。

・シュナイデン……撫で切り、西洋剣術では殆ど偶然でしか出ることのない技。日本刀やカトラス等、敵を切り裂くことに適した武器でよく使われるはずの切り方なのだが上記のハウと区別の付いてないゲームの多いこと。というかデモンズソウルで曲刀使わなきゃ殆ど見れない。

・スラスト……突き、わざわざ用語解説に載せる程でもないが、ハウ、シュナイデンの区別とかでワケわからなくなっている人も多いと思うので記載

・オルクス……雑巾を絞るように剣を持ち、おでこのちよつと右上あたりで切っ先を下げ、相手に向ける構え。スラストを打つときの基本。描写では省いたがスラストを打つときは最後の一撃を除き青入道、主人公共にこの構えから打っている。

・リール……工事現場の赤いコーンを撫でるように剣を回すこと。フェンシングでの牽制でよく見るアレ。敵の剣を搦め取る時にも使う。リール↓オルクス↓スラストはカウンターの基本。

red wing改訂前2 (前書き)

こちらで新たに登場する用語は用語解説に載っていません。
改訂後よりも専門用語満載です。

red wing 改訂前2

あたしをイカそうとして、油断したのだ

そういうのを早漏っていうんだよね

怒りと苦痛に満ちた、あいつの絶叫が聞こえる

ダメだよ

まだ終わってない

あたしたちはまだどっちもイツてない

そこには夢などなく

怯えもない

ただただ純粹な命の交わりがあつて

その二つの命が、死という細い境界線の上でダンスする

最高のセックス

詠み人知らず、そして偉大なる師匠

なぜ山に登るのか？　そこに山があるからだ。どこかで聞いたことがある、そんなやりとり。そうだ、何かをするのに理由なんて必要は、ない。

人間は、僕はいつも一つのことだけをする。それはできることだけ。出来ること以上のことをする気はないし、そんなことする必要がある時は。自分でやるには怖くてできないこと、死ぬときだけ。

僕は臆病なんだ。それも母親や、婆ちゃんが強姦されていようと、幼馴染が競りにかけられていようと、一緒に遺跡やら街やらを荒らしてバカ騒ぎしてきた仲間が目の前の、妙ちくりんな翼の生えた青入道にぶっ飛ばされていようと。たった一つのことしかできない。できない以上、何かしらの工夫をしなくちゃ、殺しなんて出来ない

あたりを見回す。

少なくともあの、子供にしか股間が反応しないモグリの医者はこの部屋のどこかで熟睡してるだろう。あいつは確か女の股から出るアレ以外の血を見るとデカイ杖持ってすつとんでいく奴だ。じゃなきゃあっちでせわしなく”まほう”とかいうのを編んでたあいつは挽肉になっていない。どっかの王国で騎士やってたらしい、やたらと身だしなみを気にするあいつも、そこらの化物よりも不気味な格好で天井に引っかかっていたりなんかしない。

青入道はほぼ、どこでつけたのかわからない円形状の古傷とかを除けば擦り傷ひとつ負ってなくて。にやにやしながらこちらに歩み寄ってくる。

そういえば、いきつけの酒場のオヤジが言ってた。オマエは騙されやすいんだから、やたら慣れ慣れしいヤツには注意しろって。僕にはあんな肌の青い友人なんかいない、記憶力に自信がなくてもわかる、完全に初対面だ。

にやにやしながら、歩み寄ってくる。

じゃあ、敵だ。

どうしよう、怖い。自然に、口の端が釣り上がる。

心臓が、何時もより速い。

自分の右腕の延長線上にあるブロードソードを、握り直す。

親指と人差し指をリカッソにかけ、握り潰すように、強く、強くバックラを前に突き出す

バックラの中心線は正中線と直角、それでいて、腕が千切れそうなほど前へ、前へ

脇を締めて、ポイントから全てをバックラで隠す

フラウエン・ハット

僕らしい、怖がりの構え

青入道はいつの間にかにやにや笑いをやめてセンターガードに、
いやアレはブルークか？

正直、どっちでもいい

青入道のヤツはおそらくこちらを舐めきっている
だってほら、重心の移動が遅い
だから、やることはひとつだ

構えを解かずにフレッシュ

ヤツのポイントをくぐり抜け

牽制替わりのハウ

案の定のバインド

そのままストロングに押し込む

アンバーに固定して、まずは腹に一発

ポイントが弾かれる

下からアッパー気味にポメルが打ち出される

こいつは本命じゃない

僕は顔でポメルを受け止め

間髪入れずに飛んできたシュナイデンを受け止め

そのまま、ヤツの顔に唾を吐く

たたらを踏んで後ずさるヤツの顔は目が点になったりこっちを二度見してみたりと中々愉快に変化する。

コウモリを連想させる翼が生えていたり、肌が青かったり（殴った感じではポイントの線も薄そうだ）なんとなく気がついてはいたけど、どうやら青入道のヤツは人間ではないらしい。

だってほら、相手の顔に唾を吐くって結構メジャーな、親愛の挨拶らしいじゃないか。そう酒場のオヤジも言っていた。だから間違いない。

それを受けて、眉間にシワを寄せて怒り狂うなんておかしいじゃないか。みんなもそう思うだろう。

だから、こいつは人間じゃない。

人間じゃないなら、罪悪感なんて、湧かない。

今、ヤツの目が据わった

今度はヤツからフレッシュ

オルクスからのスラスト

バックラでパリイ

更にフレッシュしてのポメル

よけられない

顎を打ち抜かれる

気合でカバー

更に上からのハウ

無理やり剣でパリイ

バインド

こっちがソフト

まずい

相手のリールに巻き込まれる

ソードが弾かれる

スラスト

下半身は崩されている

ソードもバックラも弾かれている

まずい

避けられない

まずい

まずい
まずい

ぼきり

青入道のソードが左腕に突き刺さる
そのまま貫通して首筋を掠める
首から血の吹き出す、ぬるりという感触

助かった

そして、チャンス

僕の左腕ごとリール

脇の下に挟み込む

ぶらり

バックラが垂れ下がる

顎へと、ポイントを打ち込む

青入道は悔しそうで、恨みがましい、この世の全てを呪い殺すよ
うな顔をしていた。

もっと、楽しみたかったね

ぼきり

ヤツの失敗した、首へのスラスト

血が吹き出す

ぴーって、笛みたいな音

まだ、死んでいない

首からソードを引き抜き、今度は胸へ

ぼきり　ぷちゅう

心臓を潰した

まだ、死んでいない

横薙ぎにハウ

そして、股間へ蹴り

ぼきり ぶち

青入道は全身をびくり、と大きく震わせた後、ゆっくりと地面へ倒れて行く。

殺した

青入道を、殺した

あたりを見回す

僕の足に、白い粘液がついている。

ああ、なるほど

こいつも、興奮していたんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1179/>

スネイク・セクス

2010年10月8日14時22分発行